

1. 現在の発掘調査状況

土橋北遺跡A区は、縄文時代後期（約 3,500 年前）の面を調査しています。遺物は、土器・石器がたくさん出土しています（第1図）。

調査も終盤となっていますが、今年は例年よりも早く雪が降りました。このため、少ない晴れ間を利用して調査をおこなっている状況です。



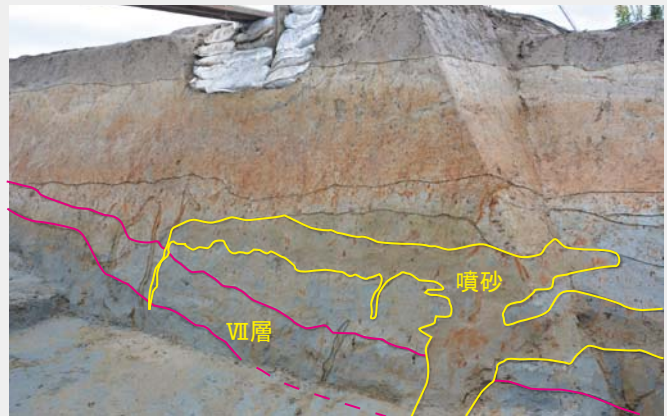
第1図 発掘調査のようす

2. 地震の痕跡

現在調査を行っているA区では、大きな川跡が見つかりました（「発掘調査だより」10月号を参照）。この川跡は縄文時代の地面を切って作り出されていることから、平安時代～鎌倉時代に流れていたと考えられます。

その後、川跡の調査をすすめると地震の痕跡がたくさん見つかりました。液状化による噴砂が発生し、地面が大きく落ち込んでいる様子が見られます（第3図）。また、川の両岸の高さも、西側が東側より約1m低くなっています（第4図）。

このことから、地震の影響によって地面がずれた、あるいは亀裂が入ったところに水が流れ込み、川が形成された可能性が考えられます。これらの調査成果をもとに、今後も川跡の成り立ちを調べていきたいと思ひます。



第3図 陥没付近の土層断面

3. 普及・啓発活動

12月2日（土）に、市内緑町文化センターで土橋北遺跡の報告会を開催しました。当日は緑町を中心に種々の文化的活動に取り組んでいる「緑親会」の方々44名が参加されました。

報告会では、遺跡の概要説明と出土遺物の解説を行いました。とくに江戸時代の様子や出土遺物には興味関心が集まり、たくさん質問の音が上がりました。

今後も、遺跡発掘調査に関する普及・啓発活動に積極的に取り組んでいきたいと思ひます。



第4図 大規模な陥没のようす



第5図 出土品解説のようす

4. 縄文土器の模様について

縄文土器に模様をつける道具は原体（げんたい）と呼ばれています。縄文土器は、その名に示されるようにほとんどのものに「縄目」の模様がつけられています。縄文の原体は撚りの向きや撚り方などにより、多くの種類があります（第5図）。このほかには貝殻を原体としたもの、竹または中空の茎を原体としたものなどもあります。縄文原体については、約40年前に故山内清男博士により研究がなされました。

第8・9図は復元した縄文原体になります。第8図は2本の紐を左に（時計回り）撚ったもの、第9図は右に（反時計回り）撚った原体になります。これらの原体を粘土に転がすと第8図は右上～左下方向に、第9図のほうは左上～右下方向に模様の流れができます。これを「条」（じょう）といいます。「条」のラインには楕円形のつぶが並びます。これを「節」（せつ）といいます。また、第8図と第9図では楕円形のつぶ「節」の傾きが異なり、第8図は左上 - 右下、第9図は右上 - 左下となります。

こうした特徴などを読み取り、土橋北遺跡から出土した土器を見てみましょう。第6図の土器は右上～左下へ向かう条の流れを見ることができ、節は左上 - 右下に傾いています。このことから、土器は第8図の原体を使用して模様がつけられたことが分かります。このように土器は形や模様などの特徴のほか、どのような原体を使って模様がつけられたのかなど、たくさんの情報がつまっています。



第5図 さまざまな縄文原体



第6図 土橋北遺跡出土土器



第8図 復元した縄文原体



第7図 土橋北遺跡出土土器



第9図 復元した縄文原体